

いま、「動物と生きる」ということ

以内に発見して吠えて知らせたり、高いところにあるシーソーを怖がらずに通過するといった本格的なもの。2匹は、こうした試験をちゃんとクリアしたのだ。「怪しい人が外を通りかかると吠えるので、わが家の防犯体制は万全ですね（笑い）」（新久保さん）

県警も「大型犬では入っていない狭い場所でも活動が可能なおから、震災や土砂崩れなど災害発生時、倒壊家屋から被災者を発見する捜索活動に期待を寄せています」と、ホームページでコメント。活躍する日も近い!?

犬との絆が高齢者を救う

7月下旬に埼玉県で起きた、盲導犬オスカーが何者かに刺される卑劣な事件。皮肉なことに、この事件が盲導犬や聴導犬への理解を深めることになった。だが、介助犬の存在はまだあまり知られていない。

「身体の不自由な人を補助するのが介助犬です。盲導犬や聴導犬は各協会から犬を借りるため、いずれは返さなければならぬ。私が行う介助犬訓練所は、飼い犬を訓練して介助犬に育て

ています。貸し出された犬に対しては、100%の仕事を求めますが、飼い犬なら80%でも許せる。完璧にならなくていい介助犬だからこそ、世の中に広がっていくと期待しています」と話すのは、柳本忠二さん。

5年前、創業した精密機器メーカーを息子に任せ、NPO法人・近畿介助犬訓練所を設立。飼い犬を預かり、介助犬として訓練して返している。

犬につきつきりで訓練を行うため、奈良市にある訓練所に併設した自宅に住み

サポートのプロ目指し訓練中！

介助犬



込み、8匹の犬とともに生活する日々だ。

「犬たちへの訓練内容は、介助を必要とする高齢者の症状によって変えます。

例えば、少し物忘れが多くなった方には、飼い主の持ち物を持ってこさせるようにする。出先で傘を忘れても、介助犬がくわえて持ち帰ります。足が不自由な方には、指示したものを持つてこさせるようにする。

軽度の認知症の人が外出先で家に帰れなくなったら、常にその横を歩き、家までの道のりを導けるようになる。寝たきりであれば、首に手を回しても、手も回しても、ベッドから上体を起こすサポートができるようにするといった具合です」

高齢者に介助犬を――。この思いは10数年前、認知症の義母を引き取り、自宅で介助した経験から生まれたものだ。

「夜中に起きて徘徊する義母の無理チューがOKなら私も、」



小学校で子どもと介助犬が触れ合うイベントに参加。介助犬とともに暮らすことについての講演も行う。

母。そのころは仕事も忙しく、壮絶な介護となりました。ところが、飼い犬のトピーを義母の部屋に入れたところ義母の心が落ち着きました。トピーは動いているものにくっつく習性があり、義母の隣に寄り添い、安心感を与えたんだと思います」

柳本さんは、趣味でトピーに警察犬が行う訓練をしていたため、人に寄り添うという習性が身についていた。これを機に犬の訓練に興味を持ち、介助犬の養成に必要な愛玩動物飼育管理士の資格を取った。犬への強い思いは、柳本さんの幼少期の体験が影響している。

「子どものころ、親に内緒で捨てられた子犬を拾って飼っていました。その犬が近所の夕食を盗んで食べてしまった。親にもバレて、捨ててこい」と怒鳴られ、河原に捨てたんです」



幼少期のトラウマは70歳になっても癒えていないという。だが、その思いが犬への愛情を深めていった。「息子が幼少時に、私と同じように捨て犬を拾ったので、もちろん飼うことを認めた。その時、犬との縁は一生続くと感じました」

トピーは柳本さんが育てた最初の介助犬となり、16歳になった今は引退して穏やかな余生を過ごしている。「現在、訓練所のスタッフは1人だけ。毎年、専門学校の卒業生を受け入れているのですが、ふんの処理など地道な作業の現実に挫折して長続きしません」

課題は山積みだが、柳本さんの心は折れていない。犬との深い絆が、日本の高齢化社会を救う――。柳本さんの思いは揺るがない。

次号 大人の袋とじ 私のじやうそうさま♡体験談 OKなら私も!

あんな無理チューがOKなら私も!

秋も元氣いっぱい 完売号